

熱性けいれんの対処について

著者	山田 真衣
雑誌名	NICかわらばん
巻	437
ページ	2
発行年	2010-09-04
URL	http://hdl.handle.net/10631/901



新潟県立看護大学
小児看護学助教

山田 真衣

熱性けいれんとは、小児科へ救急車で運ばれることが最も多い病気です。よく「ひきつけ」と言われ、38・5℃以上の高い熱を

急に出した時におこる全身

熱性けいれんの対処について

のけいれんです。生後6ヶ月から6歳頃までが起こしやすく、約9%の子どもが経験すると言われています。小さな子どもに多い理由は、脳の発達未熟だからです。未熟な脳の神経は、熱が出る

程度で自然に止まり、命に関わることや後遺症を残すことはありません。ふつう1回の高い熱に對して1回だけです。熱性けいれんをおこした時の対処のポイント

は、4つあります。まず大切なことは、①慌てないことです。そして、②舌を噛むことはないの

で、口の中に指や割り箸、ガーゼなどを詰め込んだりしないでください。また、大きな声で名前を呼ぶことや、揺すって起こそうとするような過度な刺激もいけません。苦しうだから、何かしてあげたいと思うでしょうが、かえって発作を助長し危険です。

要するに、なにもしないことが良いことなのです。また、③着ている衣類をゆるめて呼吸をしやすくしてあげ、吐くことがあるので、顔を横に向けましょう。そして、④じっと見ることで、時計を見て何分くらい続いたか、けいれんの様子をよく見て、あとで病院に行ったときに医師にきちんと説明できるこ

とが大切です。けいれんがあったからと言って、すぐに救急車を呼ぶ必要はありません。日中でしたら、その日のうちにかかりつけの病院に受診しましょう。夜間でしたら、症状にもよりますが、落ち着いている場合は、翌朝でも構いません。しかし、熱がなく、15分以上のけいれん、半身のみのけいれん、何度も繰り返すなどの場合は、別の病気がある場合も考えられますので、医師に相談してみることをおすすめします。いかに重症なけいれんの様に見えますが、とにかく慌てないことが大切です。きつとお子様自身も怖いと思うので、ご家族の落ち着いた対応がお子様の安心につながると思います。